

【公表】 事業所における自己評価総括表

○事業所名	多機能型事業所 運動療育センター キートス・トリー	
○保護者評価実施期間	令和 7 年 3 月 1 日 ~ 令和 7 年 3 月 8 日	
○保護者評価有効回答数	(対象者数) 36	(回答者数) 27
○従業者評価実施期間	令和 7 年 3 月 5 日 ~ 令和 7 年 3 月 12 日	
○従業者評価有効回答数	(対象者数) 9	(回答者数) 9
○事業者向け自己評価表作成日	令和 7 年 3 月 20 日	

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	他職種が多い(多職種連携による支援体制)	複数の専門職スタッフ(例:理学療法士、保育士、社会福祉士など)がチームを組み、定期的にカンファレンスを開いて利用者の情報や支援方針を共有している。また、お互いの専門分野を理解するため勉強会やケース検討会も実施し、多職種間の連携を強化している。	定期的な外部研修や合同研修を開催し、最新の知識をチーム全員で習得する取り組みも進める。
2	少人数制の運動プログラム	1クラスあたり少人数(数名)に限定し、スタッフが各利用者の体力や発達段階に応じた運動メニューを作成している。少人数だからこそ可能な丁寧な見守りや声かけを行い、個々のペースに合わせた運動支援を心がけている。	運動プログラムの質向上のため、各事業所のアドバイスなどを積極的に取り入れる。子供たちが楽しめるような企画のMTGなども検討し、利用者が楽しみながら身体機能を高められるよう工夫する。
3	学習療育プログラムの提供(発達支援を兼ねた学習支援)	一人ひとりの発達段階と興味に合わせた学習教材を用意し、遊びや日常生活の動作を取り入れながら学習支援を行っている。学習活動を通じて集中力やコミュニケーション能力など発達面の向上も図れるよう、療育要素を組み込んだプログラム設計を工夫している。	学習療育プログラムをさらに充実させるため、新しい教材やデジタル学習ツールの活用を進める。また、子どもたちの興味関心に基づいたテーマ学習を取り入れ、主体的に取り組める環境を整える。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点	事業所として考えている課題の要因等
1	運動プログラムが個別対応でないため、年齢や発達段階の違いによって運動の難易度にばらつきが出る。	利用者の年齢や発達段階に差があるため、同一の運動プログラムでも各利用者にとっての難易度にばらつきが生じている。また、小集団での支援であることから、各個人に合わせた個別の対応が難しい状況である。	運動プログラムを利用者の体力や発達段階に応じて難易度別に複数のパターンに分けて用意することが考えられる。加えて、必要に応じてスタッフを適切に配置して個別に補助を行うことや、活動前に各利用者の体力・健康状態を確認した上でプログラムを調整する取り組みも必要である。
2	保護者とのコミュニケーション頻度・内容にばらつきがある。	保護者への連絡は月1回の活動写真の送付を基準としているが、職員ごとの声かけや補足連絡の頻度や内容に差があり、保護者によって情報量に偏りが生じている。	月1回の情報共有を基本としつつ、伝える内容のテンプレート化を進め、誰が対応しても同じレベルの情報が保護者に届くようにする。加えて、連絡帳や口頭での補足説明が必要なケースは職員間で事前に共有し、対応の偏りを減らす体制を整える。
3	事業所内で行うイベントは充実しているものの、地域住民との交流機会が少ない。	現在、行事やイベントは主に事業所内で完結しているため、地域住民や地域団体との接点を持つ機会がほとんどないことが課題の要因である。	地域で開催されるイベントへの積極的な参加や、地域の学校との交流会の企画。また、地域との連携を深めるために事業所内に地域交流の窓口担当を設けることも検討し、地域住民との接点を増やす取り組みを進める必要がある。